

小松防衛博覧会の賑わい（このころ）

昭和三十七年（一九六二）九月二十三日、高松宮^{たかまつのみや}ご夫妻のご臨席の下、「産業と防衛大博覧会」（小松博）が賑々



起工式に臨む和田市長（『小松・加賀・能美 今昔写真帖』より）

しく開会した。

この博覧会は、小松空港と航空自衛隊小松ジェット基地完成を記念して挙行されたものであるが、前年の市議会で「地方自治体の防衛博開催は前例がない」、「民間の航空とジェット基地の併用そのものが危険である」等の批判が相次ぎ、開会そのものが危ぶまれた。しかし和田傳四郎市長は、戦時中からの「空の大小松構想」実現のためには、空港と基地の「併存」しかないと考え、市民の理解を得るためにも、小松博の開催を主張し、一歩も譲らなかつた。

実際、末広体育館を中心とした博覧会会場には、スポーツ館、電力館、特設大噴水等のパビリオンの他に、陸海空自衛隊の各種近代兵器がずらりと展示され、さらに初日には航空自衛隊の

アクロバット飛行も披露され、名実ともに「産業と防衛」の博覧会となった。

一方、こうした場外での「賛否両論」をよそに、小松博は爆発的な人気を呼び、会期四五日間の入場者数は延べ五万一千三百五十一人、遊具利用者八万五千四百一人、駐車バスが五〇六〇台、タクシー・ハイヤーが一万三千二百四台に上り、入場者に対する売り上げ総額が五四六万五円、その他の収入を加えて計九四二五万円が計上された。

また、小松商店会連盟ではこの小松博をさらに盛り上げようと「ミス小松博」のコンテストを実施し、投票の結果は、島中菊江（今江）、北野まり子（八日市）、谷口君子（粟津）、南野康子（三日市）、串岡みえ子（西町）の五名が当選した。彼女たち「ミス小松博」

は、大会前の九月中旬には飛行機で名古屋屋中日球場を訪問し、抽選で選ばれ

た一般市民五〇人と野球観戦し、大会開催中は各会場の顔として各バビリオ

ンに花を添えることとなった。

(平野 優)



スチュワーデススタイルの小松博のキャラバン隊出発式(『小松市制50周年記念誌』より)



家族づれや若者たちで賑わう第1会場(『小松・加賀・能美 今昔写真帖』より)